

H-5 メディカルコントロール体制構築と 高気圧酸素治療

山本五十年¹⁾ 中川儀英¹⁾ 猪口貞樹¹⁾
小森恵子²⁾

〔¹⁾ 東海大学救命救急医学〕
〔²⁾ 同 診療支援部〕

【目的】今日、救急医療システムの改革事業が進められようとしている。この眼目は、いつでもどこでも最善の救急医療を提供することにある。このため、・救急ヘリによる広域搬送システムの推進、・病院前医療の質の管理システムの確立、・救命救急センターの強化と倍増、・標準的心肺蘇生法（ACLS）の普及、・外傷教育プログラムの策定と普及（医師向けJ-ATEC、救急隊員向けPTEC）が進行中である。こうした病院前～病院の一貫した医療を実現するシステムとして、メディカルコントロール（MC）体制構築が進められている。今回、MC体制構築による高気圧酸素治療への予測される影響につき検討した。

【方法】米国のメディカルディレクター制度をモデルとして、2002年度には、すべての都道府県にMC単位地域を設定し、MC協議会を設置することが決定されている。このMC協議会は、認定MC指導医が中心となり、救急活動プロトコルの策定、研修プログラムの導入と履修、定期的な病院実習『指示、指導・助言』システムの確立、事後検証システムの確立、症例検討等の生涯教育の実施等の環境を整備することになる。このシステムが確立すると、重症度緊急度の判断基準に基づき、搬送病院の選定が行われ、集団災害医療における地域対応もまたMC協議会で検討される。こうしたMC制度が高気圧酸素治療／再圧治療（HBO）にどのような影響を与えるかを検討し、今後の課題を明らかにした。

【結果と結論】MC協議会が救急医療システムの主体となるため、地域救急活動プロトコルやオンラインでの指示、指導・助言内容にHBOが含まれなければ、病院選定上、HBO施設が欠落する恐れがある。急性一酸化炭素中毒、減圧障害等の緊急HBOを必要とする救急疾患への現場対応と病院選定については、今後各地に設置されるMC協議会で検討し、緊急HBOシステムを地域救急医療システムに位置付けることが不可欠である。

H-6 急性期脳梗塞に対する薬物療法と HBOの治療効果総合的比較および 併用療法の試み

萩原万里子 土居 浩 岩間淳一
三須恭典 杉山弘行

（都立荏原病院）

【目的】最近急性期脳梗塞患者薬物療法の発達は著しく、今回薬物療法とHBOによる治療効果について作用機序、保険点数、患者への負担等を総合的に加味し脳梗塞に対するHBO治療のあり方について検討、さらに両者を併用し臨床的效果をあげた症例を報告する。

【方法】当院では、HBOは第2種装置を使用し7-10回施行。薬物療法は主に神経内科が扱い脳塞栓、脳血栓、ラクナ梗塞と病型、病態に応じて可及的速やかにヘパリン、選択的抗トロンピン薬（ノバスタン）、TxA2阻害薬（カタクロット）、脳保護薬エダラボン（ラジカット）及び十分な了解を得た例でtPA（クリアクター）を使用。

【結果】平成13年度HBO212例中脳梗塞31例で全体の15%。薬物療法は脳梗塞入院患者215例でヘパリン47例、ノバスタン35例、カタクロット89例、ラジカット59例（但し8月以降）、クリアクター13例であり（重複例有）、HBOの併用は原則施行していない。超急性期中大脳動脈閉塞症例でヘパリン、ラジカット併用も症状進行し発症24時間以内にHBO施行し著効、効果が持続した例を認めた。

【結論】HBOの脳梗塞に対する作用機序は主にPenumbraへの神経細胞の存続をのばす脳保護作用とさらに酸素の脳血管へのAutoregulationから脳動脈攣縮による虚血巣への血流増加作用が考えられ、Penumbra部位は糖代謝低下より虚血による低酸素優位で早期HBO有用と考えるが3時間を経てからは脳浮腫抑制にもある。著効例は超急性期脳塞栓で広範に虚血部位が発生するためPenumbraも一様でなくHBOが臨床的效果を示す余地があり、Penumbra残存と思われる時期に全身状態良好でHBO施行可能例で劇的改善を期待できたと考える。今後さらに臨床効果と副作用、診療報酬面等を総合的に加味し症例を選んでQOLを高める治療を選択し検討を重ねたい。